

<書評> 長尾正憲著 『福沢屋諭吉の研究』

宇佐美, ミサ子

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

83

(終了ページ / End Page)

86

(発行年 / Year)

1989-03-24

〈書評〉

長尾正憲著

『福沢屋論吉の研究』

宇佐美ミサ子

本書は著者が本学大学院時代から一貫して取り組んでこられた福沢論吉に関する研究成果をまとめて世に問われた論文集である。まずはじめに後学のわれわれにとつて、著者の長年にわたる研鑽の労に深甚の敬意を表したい。

ところで、福沢論吉に関する研究は、従来多くの研究者によって、伝記的・思想的解明は為されているが、本書のように『福沢屋論吉の研究』と題される書は少ないように思われる（・印筆者）。福沢が「福沢屋論吉」の呼称を用いたのは、自らの著作を出版・販売するために、明治二年（一八七〇）に書物問屋仲間に入するに際して名のつた屋号である（第Ⅱ部第一章）。福沢が一期出版事業に手を染めたことは一般には知られておらず、筆者も著者の学会報告で初めて知った。

本書は福沢論吉（一八三五〜一九〇一）が安政二年（一八五五）に緒方洪庵の適塾に入り蘭学を研究した時期から、明治十五年（一八八二）『時事新報』発刊に至るまでの約三〇年間の生活と事績を中心に実証的に究明した史学論文集で、福沢に関する膨大な資料・文献を余すところなく消化され、精緻な分析方法をふまえて出版事業家としての福沢の側面を捉え、「企業経営者福沢論吉」

書評 『福沢屋論吉の研究』（宇佐美）

の実像を再構成されている。本書は既に発表された論文十二編を骨子として、新稿三編とさらに「シーボルトの一八六一年の蘭文日記」を加え、三部に構成しそれぞれに「付記」を付している。以下、紙幅の許すかぎり、本書の概要を順次紹介し、充分とはいえないが、最後に筆者の読後感で締めくりたいと思う。本書の章別構成は以下のものである。

第一部「幕臣」福沢の形成・発展過程

——「福沢屋論吉」の歴史研究——

第一章 幕末洋学史における適塾の地位

第二章 安政期海防掛の制度史的考察

補論 江戸幕府は開国にどのように対応したか。

第三章 外国奉行支配通弁方・翻訳方の一考察

第四章 福沢の幕府出仕について

第五章 福沢論吉の政治思想形成過程

——文久渡欧との関連として——

第六章 幕臣福沢論吉の政治思想発展過程

——『西洋事情』成立の背景——

第Ⅱ部「福沢屋論吉」の生成・発展過程

第一章 「福沢屋論吉」の生成過程

第二章 「福沢屋論吉」の発展・転換過程

第三章 福沢の著作権思想の種本と偽版問題

第四章 明治二年の出版条例成立と福沢論吉

第五章 明治十四年政変と『時事新報』創刊

第六章 福沢における出版社・著者・読者の関連

—— 出版社会史側面 ——

第Ⅲ部 福沢諭吉の西欧体験

第一章 福沢諭吉『西航海手帳』の蘭文記事

〔史料〕福沢諭吉『西航海手帳』の蘭文記事

〔付録〕『西航海手帳』の記事概要

第二章 現地新聞より見た文久遣欧使節団のオランダ滞在

第三章 シーボルト文久元年日記について

—— 福沢の外交書翻訳と渡欧との関連として ——

〔史料〕シーボルトの一八六一年蘭文日記

見られるように、全体は三部構成をとり、第一部では外国語（オランダ語・英語）に精通した「幕臣」福沢の幕府外国方の翻訳方としての生活と成果を探る。第Ⅱ部は「福沢屋諭吉」と呼称し年商十二、三万両の収益をあげるまでに成功した企業家としての福沢の実像に迫り、あわせて近代出版企業の内容を明らかにする。第Ⅲ部では福沢が「文明開国」「富国強兵」「人材教育」という生涯の大非願をたてる契機となった西欧体験の成果と意義を究明したものである。

第Ⅰ部第一章では、福沢の人間形成を培ったといわれる適塾の形成・発展を論じ、福沢の啓蒙思想家としての基盤は適塾の中に築かれていった過程を明らかにする。まず適塾の開塾から、教育課程・塾風・塾生の階層・地域性・特徴について検討され適塾の幕末洋学に果たした役割、すなわち適塾の幕末洋学史における位置づけを明確にされた。第二章では安政期の海防掛を制度的側面から検討された。まず、先行研究をふまえて新たに乙骨彦四郎

の残した『乙骨耐軒文書』の中の海防に関する史料を中心に海防係の組織・職制・機能を明らかにし、安政期の海防係体制について詳述されている。本章は安政期の海防掛体制を通して著者の永年の研究の蓄積である幕末外交制度の一貫をなすものである。第三章～第四章は通弁方・翻訳方・書物方の形成から確立に至る過程を明らかにする中で、主要スタッフである人物の経歴を追い、福沢との協力関係や個々の事象を通して「幕臣」福沢の人間像を再構成する。とくに通弁方福地源一郎・箕作貞一郎らとの関係で福沢が次第に国際的視野を広げていく過程が具体的に明らかにされ注目したい。第五章～第六章では福沢が文久渡欧使節として次第に政治に対する問題意識を持ちはじめ、政治思想を形成する過程を明らかにし、『西洋事情』執筆に至るまでの政治的背景について究明された。前章では福沢の渡欧前と渡欧中・帰国後の政治思想がどのように形成され、国内の「攘夷旋風」の中で、変質していくかを叙述する。福沢が経済力・軍事力の基本に「洋法の採用」と「人材教育」があるとしてその必要性を強調した過程には西欧体験の見聞・探索の結果があり又その体験は「富国強兵」願望の政治思想を形成する契機でもあったとする。後章では、慶応期に福沢が展開した時務論の執筆活動を検討し、『西洋事情』成立までを詳述したもので、福沢の「情報」の収集・整理を通して次第にジャーナリスト的感覚を身につけ翻訳家からすぐれた著述家としての素質を明らかにされた。

次に第Ⅱ部第一章～第二章は福沢が「福沢屋諭吉」として出版文化に深い関心を示し出版業自営に乗り出したこと、しかも慶応

義熟創設とのかかわりについて指摘し、出版業の活動を通して言論人・経済人としての福沢の実像に肉薄している。第三章「第四章は福沢が出版業を経営するにあたって著作権・偽版問題に積極的に対応していく「実務家」としての福沢について明らかにされた。しかしここでは単なる実務家ではなく「翻訳」という作業からえた著作権「知識」を著作権「思想」にまで止揚させたこと、翻訳書を一連の体系としてまとめあげたこと、著作権保護の法制化・実効化を公権力に勧告要求するのに実務家であるまえに「啓蒙思想家」としての姿勢を堅持していたことを強調されている。第五章では、明治十四年の政変の歴史的意義と『時事新報』創刊時の福沢のジャーナリストとしての活動を詳述された。まずここでは『法令公布日誌』を福沢がその発行引請けを要請され、公報日誌社設立を準備したが十四年政変によって流産してしまった。この間の福沢の新聞発行計画と、政府の『官報』発行の経緯、そして福沢が純民間新聞『時事新報』第一号を発刊するに至るまでを明らかにされた。新聞人としての福沢の成功は明治十四年政変から「独立不羈」という新聞の独立性・中立性の価値を学び得たところにあったとする。第六章は福沢の出版者・著者・読者の関係を探り、三者は一体関係にあってこれがまた大きな特徴をなすと指摘、福沢の出版活動に果たした役割を明らかにされた。第Ⅱ部は以上であるが、ここでは企業家としての福沢の実像にせまり、近代化を促進するための福沢の合理主義的側面が見事にとらえられ大変興味深い叙述であった。

第Ⅲ部第一章～第三章とも福沢の西欧体験を中心に論述され、

書評 『福沢屋論吉の研究』(宇佐美)

いずれも日蘭関係の論文が主流である。第一章は福沢が文久渡欧使節として長期にわたる西欧体験で、西洋への開眼をもたらしたといわれる『西航手帳』について全文紹介され、第二章では文久遣欧使節団の随員のオランダ滞在中の動向について叙述、解説を付した。第三章ではシーボルトが第二回の日本来訪時に書かれた『蘭文日記』の性格及び概要を明らかにし、巻末に史料全文を和訳し紹介されている。

以上、紙数の関係もあり、きわめて不十分な内容の紹介に留まったが、全体を通読した第一の印象は著者が『大日本古文書』の『幕末外国関係文書』をはじめ、多岐にわたる膨大な文獻、史料収集にさいたエネルギーとそれを駆使されての綿密な実証的分析方法によって、より正確な論証を展開されていることである。飯田鼎氏は『週刊読書人』(一九八八・一〇・一七)で本書を「わが国の実証史学が生み出した秀れた成果」と評され「史学探索の厳密さ」と「その渉獵の広さ」は他に「類をみない」と述べられているが、まさにその通りで著者の学問研究に対する誠実さの結果ともいべきものであり畏敬の念を禁じ得ない。第二の印象は福沢の知られざる側面から福沢の「実像」が明らかにされたことである。従来あまり触れられなかった福沢論吉の企業家としての側面が「福沢屋」という出版業を媒介として浮彫りにされ、かつまたそれは慶応義塾の教育活動との関係で解明されていることがきわめて印象的であった。これは福沢の現実的合理主義が基底をなしているのであろうと考えられるが、近代化促進にかける福沢の情熱・心情をおしはかることが出来るのである。最後に福沢は三

回にわたって渡航しているが、文久遣欧使節としての屈体体験が福沢のメモともいべき『西航手帳』によって具体的に明らかにされたことで帰国後の福沢の政治に対する見解、思想形成を知る手がかりとして貴重なものであろう。史料的に大変意義深く今後の外交史の研究に大いに裨益するものと考えられる。

以上、ご労作に対し非礼をも顧みず貧しい読後感を記したがご寛恕戴きたい。近代史の専門家でもない筆者があえて書評をお引き受けたのは、著者が「あとがき」に自ら「晩学」と記されているように、著者は四十代後半に本学大学院に入られ、研究一途に精進されてきた。この学問的情熱に対し筆者は大なる刺激をうけ、著者の学問に対する真摯な姿勢に衷心より御祝詞を述べたいからであった。

向後、永く後進の御指導を願ひ筆者の拙い書評にかえたい。

（一九八八年七月十五日発行、九八〇〇円。本文五六〇頁、写真一葉人名索引一八頁、思文閣出版）

【会員編著書抄】

- | | | | |
|----------|-----------------|---------|-----|
| 村上 直共編 | 『藩史大事典』九州編 | 雄山閣 | 昭63 |
| 村上 直編 | 『藩史大事典』北海道・東北編 | 雄山閣 | 昭63 |
| 芥川 龍男編著 | 『江戸幕府八王子千人同心』 | 雄山閣 | 昭63 |
| 山本 光正著 | 『日本海地域史研究』第八輯 | 文献出版 | 昭63 |
| 『成田街道』 | 『武家文書の研究と目録(上)』 | お茶の水図書館 | 昭63 |
| 大久保 利謙監修 | 山本 光正著 | 聚海書林 | 昭62 |
| 松平 乘昌 | 『成田街道』 | | |
| 岩壁 義光解説 | 大久保 利謙監修 | | |
| 湯本豪一共編 | 『黒船来航譜 開港への序曲』 | 毎日新聞社 | 昭63 |
| 『明治漫葉集』 | 湯本豪一共編 | 文藝春秋 | 平1 |